近親憎悪？　ウィーンのイディッシュ

野村真理

はじめに

個人的な思い出から稿を起こすことをお許しいただければと思う。一橋大学の助手だったころ，私がいた共同研究室の真向かいが社会言語学者田中克彦先生の研究室だった。先生がいったい何言語習得されたのか，私には想像もつかないが，イディッシュ語とくれば決まったように発せられた先生の質問は，「イディッシュ語は崩れたドイツ語か？」「イディッシュ語はドイツ語の方言か？」というものだ。先生としては，「そう思う」と答えてもらって，「いや，違うんだよ。イディッシュ語は独立した言語で，すべての言語は平等だ」と話をもってゆきたいわけだ。質問された方は，端から先生のシナリオが丸見えで，そこがまた先生の実にかわいいところだったが，正直，返事に困った。

しかし，言語学者が，イディッシュ語は独立した言語だと主張したがるのとは裏腹に，イディッシュ語は崩れたドイツ語だと言い張ったのは，何を隠そう，かつての，あるいは現役のイディッシュ語話者であったユダヤ人自身ではなかっただろうか。とりわけこのような現象が見られたのは，いやでもイディッシュ語とドイツ語の類似や相違を意識せざるをえないドイツ語圏のユダヤ人においてである。ウィーンもまた，彼らがいう崩れたドイツ語が正しいドイツ語の海にのみ込まれた都市のひとつだった。

ウィーンにおいて，イディッシュ文学は何を遺したのか。いや，むしろ，ウィーンにおいて，イディッシュ文学は，なぜ何も遺せなかったのか。これを論じたのが，メンデル・ノイグレッシェルの5章だてのイディッシュ語論文「ガリツィアの近代イディッシュ文学　1904-1918」の最終章「ウィーンのイディッシュ文学とジャーナリズム」である[1)]。なぜ，ガリツィアの近代イディッシュ文学にウィーンが含まれるのか，その理由は以下で明らかにされるが，1880年代から1938年のナチ・ドイツによるオーストリア合邦の前夜まで，ウィーンを舞台とするイディッシュ文化活動を紹介したこの論文は，ノイグレッシェル自身が役者の一人として細かい人間関係や事情に通じていただけに，いっそう貴重な文献といえる。本稿では，ノイグレッシェルに依拠しながら，この時代のウィーンのイディッシュ事情を見てゆきたい。

1. ジャルゴンがすべてを台無しにしている・・・

ウィーンでユダヤ人社会の形成が本格化するのは，1848年革命後，1850年代に入り，オーストリア帝国でユダヤ人に対する移動の制限が撤廃されてからである[2)]。革命以前のウィーンは，原則としてユダヤ人の居住を禁止しており，高額の寛容税と引き替えに市内での居住特権を与

えられたユダヤ人は，革命当時でわずか197家族にすぎない。もちろんこれは表向きの数字であり，不法にウィーン市内に住むユダヤ人は約4000人，リーニエと呼ばれる市の外壁の外側の工場労働者や最下層民が住む地帯まで含めれば，その数は6000人ともいわれた。しかし，いずれにせよ20世紀はじめまで，ウィーンのユダヤ人口の急速な増加は，1850年代以降のユダヤ人の帝国内移住の結果であった。

移住の先陣を切ったのは，現在の国名でいえばチェコにあたるベーメン，メーレンのユダヤ人であり，それに続いたのは，現在の国名でいえばスロヴァキアにあたる上ハンガリーや，ブルゲンラントの一部にあたる西ハンガリーおよびハンガリーのユダヤ人である。これらユダヤ人は，もとは西方イディッシュ語の話者であった。西方イディッシュ語は，ガリツィアやポーランド，リトアニアのユダヤ人が使用する東方イディッシュ語に比べ，さらにドイツ語に近似する。ノイグレッシェルによれば，ドイツ語に同化したウィーン・ユダヤ人は，メーレン・ユダヤ人は堕落したドイツ語を語ると揶揄し，東方イディッシュ語のユダヤ人は，彼らは堕落したイディッシュ語を語ると揶揄したという[3)]。そして最後に，19世紀末，鉄道網の整備とともに流入を開始したのがガリツィアのユダヤ人だった。ウィーンのユダヤ人口は，1880年に7万3222人（ウィーンの総人口の約10パーセント），1910年には17万5318人へと増加した。

しかし，すでにドイツ語に同化したウィーン・ユダヤ人のあいだで，イディッシュ語の評価はさんざんだった。1890年にガリツィアのルヴフ（ポーランド語称。ドイツ語称はレンベルク，ウクライナ語称はリヴィウ）のベンヤミン・トライスラーの劇団がウィーンを訪れ，「イディッシュ演劇の父」と呼ばれるゴルドファーデンの作品『スラミート』のカール劇場での上演を申請する[4)]。カール劇場は，ヨハン・シュトラウスのオペレッタ『ウィーン気質』が初演された劇場で，場末の小劇場ではない。ウィーンの検閲局は芝居の台本をユダヤ人ゲマインデ[5)]に送り，意見を求めたが，回答は以下のとおりであった。

「当該の楽劇は，［タルムードのなかの］伝説をきわめて道徳的な仕方で巧みにドラマ化したものである。それゆえ，よき音楽と標準ドイツ語で上演されるならば，この楽劇は，その感銘的とはいいかねる結末にいたるまで，劇そのものによっても，またオリエント的な場面の使用によっても好印象を与え，緊張することなく聞きとげられたであろう。しかし，ジャルゴンがすべてを台無しにしている。それゆえ，本回答の署名人であるゲマインデ代表は，昨今の反ユダヤ的な動きをも考慮し，上演を差し控えさせるよう勧告したい。キリスト教徒にはほとんどまったく理解できず，ユダヤ人にもほんの部分的にしかわからないような上演は，ある者たちにユダヤ人を馬鹿にするきっかけを与えるだけであり，場合によっては騒動の引き金ともなりかねない[6)]。」

実は，この一件に先立つこと10年前の1880年12月，イディッシュ演劇の作家にして俳優，演出家でもあったフルヴィッツが，自身の劇団を率いてウィーンを訪問し，名門のリング劇場で5幕ものの笑劇『ディブックあるいは「奇跡の男」』を上演したのだが[7)]，ゲマインデは，そのときの悪評に懲りていたのかもしれない。ウィーン警察は，劇場の模様を次のように報告している。

「詰めかけた観客の大部分は，出演者たちの訳のわからぬポーランド・ユダヤ人ジャルゴンのために劇の筋書きについてゆくことができず，また，はじめから終わりまで，演技も不十分な

ら歌もひどかったので，観客はいく度もブーをならし，不満をあらわにした。そして2幕目の終わりには，もう出て行ってしまった[8)]。」

あるいは，知識人が好んで購読した新聞『ノイエ・フライエ・プレッセ』の劇評は，「コンゴ・ニグロの言葉といえども，今日，われわれが聞かなければならなかった訳のわからぬ言葉に比べれば理解不能ということはあるまい[9)]」というものだった。

多民族国家オーストリアの帝都ウィーンには，帝国のあらゆる民族の出身者が集まっていた。たとえば同じガリツィアからポーランド語の劇団がきて芝居を上演するとき，はたしてウィーンのポーランド系住民は，ポーランド人を馬鹿にするきっかけを与えるから上演をとりやめさせよ，といった否定の仕方をするものだろうか。

ガリツィアからウィーンへ，イディッシュ語ユダヤ人の流入は第一次世界大戦後にオーストリア帝国が崩壊するまで続くが，彼らの家庭で育つ第2世代は，ウィーンで教育を受け，完璧なドイツ語の話者として育つ。第1世代のイディッシュ語の話者たちは，崩れたドイツ語で，からかいの的になるだけのイディッシュ語が，ウィーンで独立の言語として維持されなければならないという感覚をもたなかった。そうであってみれば，ウィーンにはつねに少数ながらもイディッシュ語人口が存在していたにもかかわらず，イディッシュ語が何ものかを遺すのは非常に困難であった。

2. ウィーンのイディッシュ

それではウィーンで，細々とであれイディッシュ語が話され，聞かれ，読まれたのは，どのような状況，どのような場面においてだっただろうか。

(1)『ヴィーナー・モルゲンツァイトゥング』

まず第1に，イディッシュ語しかわからないユダヤ人には，イディッシュ語で情報が提供される必要があった。

東ガリツィアのブローディで生まれたユダヤ人のドイツ語作家ヨーゼフ・ロートが『放浪のユダヤ人[10)]』で描いているように，ウィーンで，新参のガリツィア・ユダヤ人が最初に住みついたのは，第2区のレオポルトシュタットあるいはレオポルトシュタットに隣接する第20区のブリギッテナウである。1900年についてみると，ウィーンのユダヤ人口14万6926人のうち，35.8パーセントがレオポルトシュタットに，7.6パーセントがブリギッテナウに住み，両者を合わせれば，43.4パーセントがこの2区に集中した。この，いわばウィーンのユダヤ人地区で新参者は，同郷出身者を頼ってちょっとした元手を借りたり，前借りの世話をしてもらったり，あるいはひとまわり分の縄張りを譲ってもらうか，新しく開拓してもらい，まずは手っ取り早く行商人や掛け売り人から新生活をスタートさせる。扱う商品は，石鹸やズボン吊りやボタンに鉛筆など，背中のかごに入れて持ち歩けるものだ。手に職をもつ者は，仕立屋のような職人になった。ひと部屋に台所しかない住まいが，仕事場と夫婦に子どもたちの居間と寝室を兼ねた。

おそらくそんな彼らのあいだで，口から口へと伝えられるイディッシュ語の情報のネットワークが機能していたはずだが，その存在は，ウィーンの歴史に何の痕跡も遺していない。という

のも，イディッシュ語の故郷を捨てた彼らの夢は，こうしたネットワークのお世話から一日も早く抜けだし，ひとかどの商人に成り上がること，ウィーンの目抜き通りにモード・サロンの一軒も構えること，自分の代で成功が無理なら，息子が博士の称号をもつ弁護士や医者に出世することだったからだ。

ところがウィーンで，口頭の情報ネットワークだけでは対処できない例外状況が発生したのが，第一次世界大戦の戦中，戦後の一時期である。

1914年8月に第一次世界大戦が始まると，ガリツィアに押し寄せたロシア軍は弱体なオーストリア＝ハンガリー軍を蹴散らし，同年末までにガリツィアのほぼ全域を支配下においた。そのためガリツィアから大量の戦争難民が発生し，平時であればウィーンに移住するつもりなどなかったガリツィア・ユダヤ人がウィーンに流れ込んだのだ。1915年3月31日付けのオーストリア内務省の資料によれば，国家による何らかの扶助を受けている難民の総数は約32万6000人で，そのうち15万3000人がウィーンに集中し，推定によれば，その少なくとも半数近くか，あるいは，もしかすると半数以上がユダヤ人難民であった。ガリツィアで戦火が続くあいだはもとより，1915年9月末にオーストリア＝ハンガリー軍がガリツィア全域を奪還した後も，さらには第一次世界大戦終了後も，もはやガリツィアに戻らず，そのままウィーンに残留したユダヤ人難民は少なくない[11)]。

こうしたユダヤ人難民のための情報提供を目的とし，1915年1月1日，N・M・ラカーによって発刊されたのが，シオニスト系のイディッシュ語日刊紙『ヴィーナー・モルゲンツァイトゥング』である。同紙は，戦争中，1915年9月に軍の検閲局によって発禁とされたものの，1918年はじめから発行を再開する。報道の中心は，オーストリア国内外の戦況や難民援助にかかわる情報であるが，新聞は，ガリツィアからウィーンに逃れたイディッシュ語作家たちに，小説，詩，エッセイなど，貴重な作品発表の場を提供した。

『ヴィーナー・モルゲンツァイトゥング』は，1919年1月に『ユーディッシェ・モルゲンポスト』と名を変え，1920年5月から週刊新聞に縮小されながらも，1926年までもちこたえた。ウィーンに残留したイディッシュ語のユダヤ人戦争難民が，このころにはドイツ語ユダヤ人となり，それとともにイディッシュ語の情報紙は使命を終えたということだろう。旧オーストリア領ガリツィアは，第一次世界大戦後に独立を回復したポーランドの領土になり，ガリツィアからウィーンへのイディッシュ語ユダヤ人の流入も徐々に途絶えた。1923年のウィーンの日常使用言語の調査によれば，外国人も含むウィーンの人口186万5780人のうち，イディッシュ語と回答した者は2434人であった。それが1934年になると，同じく外国人も含む187万4130人のうち，イディッシュ語と回答した者は510人にまで減少する[12)]。

『ヴィーナー・モルゲンツァイトゥング』以前にも，イディッシュ語の週刊新聞が短期間発行された例はあり，また『ヴィーナー・モルゲンツァイトゥング』と同時期，戦争でガリツィアからウィーンに活動拠点を移したポアレイ・ツィオンのようなユダヤ人政党のイディッシュ語機関紙も発行されたが，ウィーンで，これほど長期間続いたイディッシュ語の一般新聞は，『ヴィーナー・モルゲンツァイトゥング』が最初で，また最後である。『ヴィーナー・モルゲンツァイトゥング』とその後継紙『ユーディッシェ・モルゲンポスト』は，現在，ウィーンのオーストリア国立図書館で閲覧することができる。ウィーンでイディッシュ語の情報ネットワークが

痕跡を残した例外的な例であるといえよう。

(2) イディッシュ劇場

ウィーンでイディッシュ語が話され，聞かれたのは，何といっても劇場という娯楽の場においてである。大衆的な娯楽の提供は，民衆言語のイディッシュ語に求められた最も本来的な役割であった。

『スラミート』の一件後，イディッシュ語の芝居はウィーンの大劇場から締め出されてしまうが，巡業劇団そのものは，とくに20世紀に入るとかなり頻繁にウィーンを訪れ，レオポルトシュタットの小劇場が彼らの舞台になった。1908年には，ウィーンで最初の常設のイディッシュ劇場が，レオポルトシュタットのホテル・シュテファニーのホールに開設されている。このホテルは，現在も同じ場所でホテルとして存続している。

ホテル・シュテファニー（2000年10月筆者撮影）

小劇場でのイディッシュ語の芝居は，演劇ではなく，警察による規制の対象にならないカバレットの形式で上演された。ノイグレッシェルは，カバレットを「バラエティショー」と言い換えている。カバレットでお客は，タバコを吸い，ボーイが売り歩くビールを飲みながら芝居を楽しむのがつねで，おのずから出し物も，そういう場にふさわしいものでしかありえない。すなわち，そこでは「波乱万丈，殺され，突き刺され，破滅させられ，撃ち抜かれ――　一言で言えばドラマ的ドラマ」や「コメディー的コメディー」が演じられた。しかし，雰囲気はきわめてアットホームで，かなりの観客を集めた。ガリツィアからきたユダヤ人にとって，そこはイディッシュ語を聞くことのできるウィーンで唯一の場所で，彼らのノスタルジーを満足させたし，また，まったくイディッシュ語のわからないドイツ語ユダヤ人も，エキゾチズムに惹かれて芝居を見にきたようだ[13]。

レオポルトシュタットのカバレットは東方イディッシュ語で演じられたが，ノイグレッシェ

ルによれば，1901年ごろ，西方イディッシュ語のユダヤ人によって「ブダペスター」と呼ばれた劇団が創立されたという[14]。ウィーンの西方イディッシュ語事情については，ほとんど何も知られていないだけに興味深い。

前節で述べた第一次世界大戦の戦中，戦後の例外状況は，一時期であったとはいえ，イディッシュ劇場にも影響を与えずにはおかなかった。例外状況が『ヴィーナー・モルゲンツァイトゥング』に需要を生み出したように，1920年のウィーンで，戦前のカバレットのイメージを一新するイディッシュ語の芸術劇場「自由イディッシュ民衆劇場」が誕生した。ノイグレッシェルは，この劇場は，ウィーンからほとんど出ることのなかった無名で地味な存在でしかなかったが，それでも，ロシアのモスクワ・イディッシュ国立劇場やポーランドのヴィルナ座，アメリカのモーリス・シュヴァルツ芸術劇場と同様，イディッシュ語の劇場芸術の歴史に新時代を開いたパイオニア劇場のひとつに数えられるという[15]。演劇が盛んなウィーンで自由イディッシュ民衆劇場の公演は，社会主義政党の機関紙『労働者新聞』から，反ユダヤ的なキリスト教社会党系の『ライヒスポスト』まで，また『日曜・月曜新聞』のような小新聞から，『ノイエ・フライエ・プレッセ』のような世界に知られた高級新聞にいたるまで，ウィーンのすべての新聞の劇評でとりあげられ，賞賛された[16]。

自由イディッシュ民衆劇場は，第一次世界大戦の敗戦国オーストリアの経済危機を生き延びることができず，1922年末ごろ，事実上，活動を停止する。縮小の一途をたどるウィーンのイディッシュ語社会は，財政的にとうてい芸術劇場を支えることはできなかった。しかし，イディッシュ語の芝居そのものは，芸術劇場が消滅した後も，1926年にイディッシュ語の一般新聞が廃刊になった後も，そのレベルはさておき，どこかの小舞台で上演され続け，人気を保った。イディッシュ劇場の灯は，1938年3月にナチ・ドイツがオーストリアを合邦するまで消えることはなかった。

(3) 言語的絶滅危惧種の保存活動あるいはウィーンのイディッシュ文学

1920年にウィーンに生まれたジョージ・クレア（ドイツ語名ゲオルク・クラール）の回想録『ウィーン最後のワルツ[17]』は，ガリツィアおよびウィーンのユダヤ人に関心をもつ者にとって，読み出すと止められなくなるほど面白い一冊だ。クラール一家の興隆は，1816年に東ガリツィアのスタニスワヴフ（ポーランド語称。現在はウクライナのイヴァノ・フランキウシク）で生まれたジョージの曾祖父ヘルマンが，「帝国のアジア的部分」を抜け出し，ウィーン大学で医学博士の称号を取得したときからはじまる。ジョージの祖父もまた医学を学び，ウィーンで，反ユダヤ的妨害にあいながらも医師としてそれなりの地位を手に入れ，その息子，すなわちジョージの父は，ウィーンの大手銀行のエリート行員になった。そんな地位も財産も手に入れながら，一家につきまとったのは，ガリツィア・コンプレックスである。

1926年の夏，休暇でブダペストに滞在していたとき，ドナウ川を走る遊覧船でジョージは，父に「ターテ，何なのあれ・・・」と呼びかけた。どこかで聞き覚えた，父を意味するイディッシュ語の「ターテ」をどうして使ってみたくなったのか，彼は自分でも説明がつかないのだが，そのとき彼が食らったのは，行楽気分も吹き飛ぶ父の平手打ちと，「ターテなんて呼ぶんじゃない！」「いいか，二度とだぞ，二度と」という激しい叱責だった[18]。父方と同じく，ジョージの

母方もガリツィア出身のユダヤ人だったが，子供心にジョージは，イディッシュ語訛の消えないドイツ語を話す母方の祖母が，まさにその訛ゆえに気に入らなかったという。ジョージは，回想する。

「われわれクラール一族は，すでに西欧の教育と文化を身につけた世俗的なユダヤ人の仲間入りをしていた。われわれは洗練された衣服を身につけ，称号や爵位さえ手に入れていたし，影響力も富ももっていた。しかし，われわれはまだ，完全な平等，内面的な平等をどうしてもつかむことができないでいた。［中略］われわれは承知していたのだ。ユダヤ人ではない人々，つまりゴイームは，いかに礼儀正しく，お追従さえ言ったとしても，本当のところは，カールした長いペオットをぶらぶらさせ，カフタンを着てイディッシュ語を話すユダヤ人と，ウィーンのカフェハウスから生み出された，クラール家風の，きれいに髭を剃り上げたエレガントなユダヤ人とを区別してはいないのである[19]。」

ゴイームにとって，イディッシュ語ユダヤ人もエレガントなドイツ語を話すユダヤ人も，ただのユダヤ人でしかないのであれば，子どもの「ターテ」の一言に怯え，逆上する父の姿は，痛ましくも滑稽だろう。執拗な反ユダヤ主義は，ユダヤ知識人の一部や，とりわけ差別に敏感な若者たちをユダヤ的なものに回帰させた。イディッシストで著述家のナータン・ビルンバウムは，1904年のウィーンで「イディッシュ語の夕べ」を立ち上げる。その目的は，朗読を通じて，まったくイディッシュ語を知らないドイツ語ユダヤ人をイディッシュ文学に近づけることだった。実際，夕べの参加者のなかから，イディッシュ語をユダヤ人の民族言語とみなし，熱心に学習する学生たちが現れるようになる。ビルンバウムは，次いで1905年に「イディッシュ文化」という協会を創立するが，これはまた，イディッシストの学生の最初の団体ともなった。ノイグレッシェルによれば，1904年当時ウィーンに滞在していたイディッシュ語作家アブラハム・レイゼンは，回想録『わが人生のエピソード』で次のように述べている。

「ドイツ・ユダヤ人学生が，顔に生真面目な，ほとんど神聖な表情を浮かべてショーレム・アレイヘムの一巻をもち歩く様を見るのは，実に感激的であった。彼らは，最も偉大なるイディッシュ・ユーモア作家の本ではなく，まるで小脇に『ヤコブの泉』かミシュナを抱えているかのようだった[20]。」

ちなみに，社会言語学専攻の一橋大学大学院田中ゼミでのイディッシュ語も，辞書を引き引き，実に厳粛な心構えをもって学ばれたが，ショーレム・アレイヘムの滑稽本が言語学習の対象にされるとは，はたして，その本が望んだことだったかどうか。ウィーンのようなところでは，イディッシュ語という民衆語がそれを話す民衆を失い，言語的絶滅危惧種の保存と活性化に励むインテリの言語になってしまうという逆転現象が起こることがわかる。民衆の話し言葉から知識人の言語への上昇は，ロシアやポーランドではイディッシュ文学運動の始まりに繋がったが，イディッシュ語が大衆的基盤をもたないウィーンでは，そうはならなかった。

第一次世界大戦の戦中，戦後の例外状況は，ジャーナリズムや演劇においてと同様，ウィーンのイディッシュ文学にも例外状況を生じさせた。戦火を逃れてガリツィアからウィーンに到来したイディッシュ語作家にとって，1918年秋に戦争が終結しても，それで，ただちにガリツィアでの文学活動の再開が可能になったわけではない。それどころか，戦後，旧ロシア領ポーランドやガリツィアではポグロムが頻発した上，第一次世界大戦に引き続いてポーランド・ウク

ライナ戦争，ポーランド・ソ連戦争が勃発した[21]。そのため，メレフ・ラヴィッチュ，メンデル・ジンガー，モーシェ・ジルブルグら，当時ウィーンにいたイディッシュ語作家たちが，自分たちの作品の出版を目的とし，1920年はじめに協同で設立したのが出版社「クヴァール［源泉］」である。この出版社は，質の高い月刊の文学雑誌『クリティーク［批判］』を創刊し，そこにはウィーンのほとんどすべてのイディッシュ語作家が寄稿したほか，ニューヨークやワルシャワ，ヴィルナなど，イディッシュ文学中心地の動向も詳しく紹介された。

しかし，所詮，イディッシュ語のインテリがイディッシュ語のインテリを相手に書いているような雑誌が，ウィーンで経営的に成り立つはずもない。『クリティーク』は，1921年4月には早々に廃刊となり，出版社クヴァールも1923年に事実上活動を停止した。芸術劇場であった自由イディッシュ民衆劇場が幕を下ろしたのとほぼ同時期である。その後，ウィーンで最も精力的に執筆したラヴィッチュは，ウィーンに見切りをつけてワルシャワへ，ジルブルグはヴィルナに去った。

結びにかえて

例外状況のウィーンに現れたイディッシュ語の刊行物は，先に述べたように，『ヴィーナー・モルゲンツァイトゥング』とその後継紙『ユーディッシェ・モルゲンポスト』がオーストリア国立図書館に保存されている以外，ウィーンにはほとんど何も残っていない。私が『クリティーク』全号を読んだのは，遠くエルサレムのイスラエル国立図書館の閲覧室である。ノイグレッシェルが章題に掲げたウィーンのイディッシュ文学とジャーナリズムの存在は，ホロコーストで，ウィーンでもガリツィアでも，ユダヤ人社会が消滅したこともあり，深く忘却の彼方に沈んだ。状況が変わるのは，1989年にはじまる東ヨーロッパの体制転換後，鉄のカーテンが開き，ガリツィア現地にアクセスできるようになってからである。これによって一気に，かつてのオーストリア領ガリツィアの歴史，文化，民俗に対する研究関心もまた開花し，その副産物として，ガリツィアのイディッシュ語ユダヤ人がウィーンにもたらしたイディッシュ文化も，その存在を知られるようになった。以下に，網羅的ではないが，第二次世界大戦以前のウィーンのイディッシュ文学やイディッシュ劇場を紹介する文献をあげて本稿を閉じたい。

Hans Veigl（Hg）, *Luftmenschen spielen Theater. Jüdisches Kabarett in Wien 1890-1938*, Himberg bei Wien 1992.

In a Schtodt woss starbt. Jiddische Lyrik aus Wien, herausgegeben und übersetzt von Gabriele Kohlbauer-Fritz, Wien 1995.

Brigitte Dalinger, *Verloschene Sterne. Geschichte des jüdischen Theaters in Wien,* Wien 1998.

Brigitte Dalinger, *Quellenedition zur Geschichte des jüdischen Theaters in Wien,* Tübingen 2003.

Nackte Lieder. Jiddische Literatur aus Wien 1915-1938, zusammengestellt und übersetzt von Thomas Soxberger, Wien 2008.

注

1）מענדל נייגרעשל, די יידישעליטעראטור און פובליציסטיק אין ווין, אין : פון נאענט עבר, בד. 1, ניו-יארק 1955.

メンデル・ノイグレッシェル，（野村真理訳／解説）『イディッシュのウィーン』松籟社，1997 年。本稿は，おもに同訳書の巻末解説で述べた事柄を，観点をかえ，短くまとめなおしたものである。ノイグレッシェルの論文の翻訳にさいしては，訳注の充実を心がけたが，15 年前の私の知識では正確に説明しきれていないところが多々残った。しかし，ウィーンのイディッシュ事情を知る上で，同訳書は，いまなお日本語で読めるほとんど唯一の文献であり，参照していただければ幸いである。

2）以下，ウィーンのユダヤ人社会の形成，ユダヤ人口，ユダヤ人口の分布その他について，詳しくは，野村真理『ウィーンのユダヤ人――19 世紀末からホロコースト前夜まで』（御茶の水書房，1999 年）の第 1 部第 1 章を参照。

3）ノイグレッシェル，22 ページ。

4）ヒロインのスラミートは，愛人に裏切られた後，狂女を装い，ついには元愛人の妻を呪い，その幼子たちまで呪い殺す魔性の女を演じる。西成彦『移動文学論Ⅰ　イディッシュ』（作品社, 1995 年）208 ページ以下を参照。

5）ユダヤ人ゲマインデの正式名称は Israelitische Kultusgemeinde Wien である。ウィーンに居住するユダヤ教徒が所属を義務づけられた自治的共同体。ゲマインデは，構成員からゲマインデ税や各種の手数料を徴収することにより，構成員の宗教，文化，福祉にかかわる事柄を自治的に執り行う権利をもち，国家に対しては，構成員の出生，死亡，結婚など，身分の変更にかかわる事柄を記録し，事業・会計報告を行う義務を負った。

6）Brigitte Dalinger, *Jüdisches Theater in Wien*, Dipl., Wien 1991, S. 41.　［　］内は引用者による補足。以下，同様。

7）ディブックについては，西前掲書，86 ページ以下を参照。

8）Brigitte Dalinger, Ein „unterirdisches Dasein". Jiddisches Theater in Europa vor 1914 in: *Das jüdische Echo*, Vol. 45, Wien 1996, S. 181.

9）Ebd., S. 182.

10）Joseph Roth, *Juden auf Wanderschaft,* 1927. ヨーゼフ・ロート（平田達治・吉田仙太郎訳）『放浪のユダヤ人』法政大学出版局，1985 年。

11）第一次世界大戦期ウィーンのユダヤ人戦争難民について，詳しくは，野村『ウィーンのユダヤ人』第 2 部を参照。

12）Michael John u. Albert Lichtblau（Hg.）, *Schmelztiegel Wien – Einst und Jetzt,* Wien/Köln 1990, S. 288.

13）ノイグレッシェル，40 ページ。

14）同上。1889 年に創立されたとする文献もある。ノイグレッシェル，43 ページの訳注（12）を見よ。

15）ノイグレッシェル，86 ページ。

16）ノイグレッシェル，85 ページ。

17）Georg Clare, *Last Waltz in Vienna*, London 1981. ジョージ･クレア（兼武進訳）『ウィーン最後のワルツ』新潮社，1992 年。

18）Clare, p. 85. 傍点は原文で強調されたところである。以下，同様。

19）ibid.

20）ノイグレッシェル，30 ページ。『ヤコブの泉』は，ヤコブ・ベン・サロモン・イブン・ハビブによるタルムードのアガダー部分の集成。ユダヤ教の聖典タルムードは，ミシュナ（口伝律法の教義の集成）とゲマラ（ミシュナに関する議論の集成）を編纂したもので，アガダーとは，賢者や預言者の物語や伝説，彼らが語った言葉など，宗教的戒律にかかわらない部分である。

21）第一次世界大戦後のガリツィアの状況については，野村真理『ガリツィアのユダヤ人――ポーランド人とウクライナ人のはざまで』（人文書院，2008 年）の第 2 部を参照。